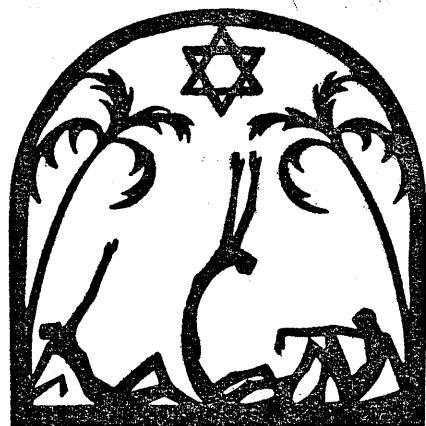


北辰會雜誌

第百二十號



北辰會雜誌部

第四高等學校北辰會雜誌
昭和三年七月九日發行
第百十二號

北 辰 會 雜 誌

1928. 7.

Wer keine Kraft zum Traum hat,
hat keine Kraft zum Leben.

— Ernst Toller. —

目次

論文

歴史の發展過程小論……………岡部利良…(二)

詩

砂丘の樹かげ……………乙村修…(二〇)

海邊……………河内勇三…(二七)

砂洲を渡りて(Tennyson)
老齡(Davies)……………高村榮…(三一)

短歌

短歌會詠草……………(三五)

川柳・俳句

浮世・初春より暮春まで……………谷田明…(三七)

創作

小品炭焼……………青木秀雄…(元)

戯小驛スケッチ……………宮川正澄…(四二)

會務報告

部報(講演部・音楽部・旅行部)

六號雜記・編輯後記

表紙 Wenn die Menschen erwachen……Hermann Piepenbrink.

歴史の發展過程小論

——歴史理論に關する問題の提出——

岡 部 利 良

如何なるものでも、それが完全な研究方法に従へられた時、初めて把握され本當に理解されうる。

——ヘーゲル——

世界は完成した事物の複合体ではなくして過程の複合体であるといふ事は、歴史の發展過程の考察に重要な意義を有つものであり、正に、歴史をかゝるものとして觀察し理解するところに於てのみ、初めて歴史の諸段階におけるあらゆる現象形態の本質は明かにされうるのである。而して斯く人間の或は自然の歴史における發展轉化の現象形態を、完成した固定的なものとしてでなく、運動の、一より他への連絡推移の、過程と解することは極めて重要なことであるが、そのみではなく、更にそれらに内在する本源的なもの、存在の究明は、より重要な、より本質的な意義を持つものである。

然し現象の複雑性や多様性は、將た一面的な偏倚な觀察方法は、正にそれ故に人々をして、往々その本質的意義の重要性の把握を困難ならしめる。今簡単に我々人間の生活關係の齎らす具体的な事實の一方面に一應の注意を止めて見よう。人々は所謂その精神的生活過程に於て、常に感覺し、認識し、思考し、或は欲求等々する。今かゝる精神的生活過程の内容が如何に變化發展するかを觀察すると同時に、何故に、如何なる原因の下にかくなるかを究明するならば、それが一切の自己の環境、客觀的な生活條件に制約され、それらに依存してゐる事を見る事が出来る。それと同時に又かゝる關係と全く反對の立脚地に立つて考察し、即ち自己中心的な主張をなす人々の見解をも見る。かゝる二様の解釋には常に遭遇する所ではあるが、更に我々の生活過程における諸關係はこれのみに止らない。精神生活そのもの、内部に於ても、外界の現象相互の間に於ても、又これ等兩者相互の間における諸關係についても、それらは極めて複雑化され、且つ密接な相互作用の影響裡にある。かくの如く我々のあらゆる生活、外界の凡ての現象は、全く不可分な影響の下に内的聯絡を持つ相互作用の中に存在することは生ける現實自体が示す所であり、それは又誰しも觀察しうる所であらう。事實、文化現象、經濟現象、其の他社會の諸關係の中に生起するあらゆる現象の各範圍内における個々の現象は相互に作用し合ひ、又甲乙異つた圈内に屬する兩現象の關係も亦兩者の相互作用の過程の下に密接な影響や重要な意義の下に關係づけられてゐる事は既に幾多見るところである。然し、かくの如き相互作用のみを問題とするならば、それは又何を齎らすであらうか？

・ 歴史上の諸現象においてもそれらは密接な相互作用の下にある事は争はれないが、然し、それらを單なる

相互作用の下にのみ觀察究明することに依つては、問題の本質は常に解決されないで殘存する。かくする時は或る限られた一定の歴史時代のみについては、稍々所與の問題の説明は可能ではあらうが、一定の歴史時代を連ねる全体的統一的な歴史の發展の説明には、其處に存在する重要な問題は自ら逸脱されざるを得ないのである。それ故に、即ちかくの如き觀察方法による理解に於ては、これら諸現象の端緒、本源如何といふ本質的な問題の解決は必然的に回避されざるを得ないのである。ヘーゲルはかゝる粗雑な方法を極力排して、これを次の様に説明してゐる。「所與の内容を相互作用の見地から觀察することに満足するならば是は最も貧弱な理解方法である。この場合には單に冷やかな事實を問題としてゐるに過ぎない。因果關係の發見を問題とする時に、云々される媒介の要素は満たされずにそのまゝになつてゐる」と。更に彼は現象の種々なる方面の相互作用について、只これらの相互作用を指摘するだけに止めないで、その説明を或る新しい「より高級なもの、中に」即ちあらゆる現象形態そのものの、これらの相互作用の可能性を制約するそのもの、中に求めねばならない事を説いてゐる（ブルハノフ「ヘーゲル批判」）我々はかゝる彼の考察方法に多くの學ぶべきものを見出すことが出来る。これに反してかゝる方法に眼を掩はんとする人々の一人としてデュルケームがその著「社會分業論」にて、道德について「道德的密度は同時に又物質的密度が發展するに非れば發達するをえない」と論じ乍ら而も「然し、兩現象の何れが他を決定するかを研究する事は不必要である。只それらが不可分であることを述べれば充分である」と言つて居るが如きは單に表面的な現象形態にとらはれた、その本質的究明の缺陷を物語るものである。

然しヘーゲルが諸種の現象を單に相互作用の中に解釋するの非を排して、それらの間に存在する本源的な存在、即ち第三者の「より高級なるもの」を他に求むべきを問題とし乍らそれを「精神の本性の中に求むべきである」と解するに至つたのは、觀念論者たる彼をして聊かも妨げはしなかつたのである。かくして彼は世界史の説明に當つて、一切の歴史は「普遍的精神の解説、實現」であると説き、或は「此善、此理性が最も具體的な表象となるものは神である。神は世界を支配し、その支配の内容、其の計畫の實行が世界史である（「歴史哲學」）と云ひ、次いで又世界史を定義して「世界精神の理知的必然的行程」と述べてゐるのである。更に彼は歴史は豫め確立された絕對觀念の實現を目標として動くを考へ、此の目標への働きが歴史的事件の内的聯絡を形成するものとなしたのである。同様にレッシングに於ては、歴史は「神による人間教育」であり、シェリングに於てはそれは絕對者即ち神の恒常不斷の自顯であつたのである。即ち歴史哲學は、殊にヘーゲルの代表するそれは、歴史上に行動する人間の諸動因を歴史的事件の究極的原因とはせずして、此等の動因の背後に探求すべき別箇の眞實の起動的勢力を認めるのではあるが、然し、「そいふ起動的勢力を、歴史そのものの中に求めないで、むしろこの勢力を、外部から、即ち哲學的觀念体から歴史の中に持ち込んでゐるのである（フオエルバツハ論）」

これに反して、歴史上行動する人間の動因の背後の究極的な起動的勢力を、歴史それ自体の中に、社會それ自体の中に、即ち人間と自然との不斷の均衡の諸關係に基因する物質的根據社會的根據それ自体の中に求めて、それによつて歴史の發展過程の内的關係の性質を明かにしたのは、所謂ヘーゲル左黨に依る十九世紀

中葉以後に於ける新しき理論的展開であり、吾々は其中に、生々とした現實の生活の究明把握に基く歴史の發展過程の本質が指摘されてゐる事を見出すことが出来るのである。

二

社會の發展は一定の運動法則に支配されて居り客觀的に存在するこの合法性の發見こそ、科學の最も重要な任務の一つである。歴史の過程におけるあらゆる現象の諸關係に存在するこの合法性に、人間理知による世界の解釋や体系を以てして、若しか、解釋や体系が不斷の生活と現實との潮流の生きた法則に合致しない場合には、これを放棄して顧みないが如き單なる世界の解釋者は、正に科學の王座から葬らるべきである。まことに世界は、歴史は、單なる理知による一つの凝固した体系によつて説明されるべきものではなく、其處には理念から獨立した、意識に先行する客觀的合法性が存在する。而して錯綜限りなき現象より、混沌極りなき過程より、それらの運動に内在する法則の必然性を認識し、顯現せしむる所に、初めて現象自体、歴史過程自体における本質の、眞の把握が可能となりうるのである。それ故にフランソア・ケネーが「根本的な社會法則は自然秩序の法則であつて、これは人類に最も利益あるものである……此法則は只一度限り造物主に依つて確立されたものである」と言つて居るが如きは、全く事實の根本に矛盾した、凡てを神の啓示に托さんとする、粗笨なる目的論的見地に基く僧侶的解釋に外ならない。かくして又歴史の過程はヘーゲルが言ふ如く絕對精神の目標に進む過程でもなくして、それは歴史的現象のあらゆるものそれ自体の中に存在し、

作用する客觀的な内的法則に従つてのみ作られる過程である。既にアリストテレスが「自然は目的である」と云ひ、内在的目的論者があらゆる現象の完全性の故に、それに内在する法則を形而上學的存在に假するが如き理由の妥當性は何處に存在するであらうか？ 其處には只、全く神の豫定などから獨立した自己運動をなす可動的な必然的進化があり、矛盾の對立の裡における一より他への不可避的な發展推移の過程が存在するのである。而して私は今こゝに——(二)において——かゝる過程における諸現象間の關係の性質如何といふ問題——それは全く重要な意義を持つものである——について簡單に究明することとする。

即ちかゝる歴史の過程に於て生起消滅する現象間に存在する種々なる關係の性質について、その諸現象間の配置を一の單なる並立關係、相互關係とのみ見るか、或は因果關係による發展過程と見るかは根本的な差異を持つものでなければならないのである。

既にヘーゲル自身も所與の現象を單に相互作用の下にのみ觀察する方法の非を指摘してゐるが、まことにかゝる方法を以てすることは、外觀の現象形態のみに促はれて、より根本的なもの、より本質的なもの、存在に盲目であり、それは又眼前の樹を見て森を見ざらんとするの類である。それは多元的な諸要素を單なる平面上に排列するものであり、従つて一より他への連絡推移の過程は全く隠蔽されてゐると言ふべきであり、かくして殘されたる検討究明すべき問題は其處には存在するのである。歴史上の諸現象の何れか一方がより影響を及ぼし、より中心であるといふ事よりは、それらの中何れが決定的であるかが重要な問題である。それらの間には單に兩者の量的關係の大小に依つて、何れか一方を中心として動くのではなくして、一が他

を必然的に規定する根本的な特質を持つ關係が存在して居り、其處には質的に異なる決定的な本源的能因が存在してゐるのである。而してかゝる現象相互間の重要な關係、即ち既に指摘したそれらの間の關係の性質を明確に規定しうるためには、所與の各現象間の性質、具体的現象の內面的聯絡そのもの、分析が最も重要でなければならぬ。單なる理念のみの、概念のみの分析、規定は一のナンセンスを意味するものでなからうか。

即ち歴史の發程過程の一聯の途上に發生轉化する諸現象間には一より他への連絡推移の過程が認知されるところに、其處には又必然的に進化の一系列の間に發生する、前後の順序と連絡が存在する事は、それらの科學的分析の結果がこれを明白に示してゐる所である。其處には最早や單なる多元的な要素の獨立的存在は許されてゐない。従つて所與の具体的現象自体の內的關係の嚴密なる分析は甲より乙への進化過程に因果關係を持つ發展推移の特質の必然性が存在することを明確に認識し規定せしめるのである。即ちある一定の現象が存在するならば、それに制約せられ、對應し、依存する他の現象が不可避的因果的に發生し現出するといふのである。

即ち對象を限られた歴史時代の一定の現象のみに止ることなく、前後の連絡する關係について、全体の過程について取扱ふ時は、獨立の孤立的主体の多元的な相互作用の關係のみを設定することは究竟に於て無意味であり、従つて歴史の諸現象の發展過程は、甲より乙への必然的聯關性を有つものであると共に、後者は前者に獨立的でありえないばかりでなく、常に兩現象の間は、因果的關係を以て基礎づけられ、それに依つて連絡されてゐる事を知る事が出来るのである。

かゝる關係は自然の發達史にも、亦その一部なる人間社會の發達史にも同様に觀察され得るが兩者の間における本質的な差異は「自然に於て相互に働きかけるものは、自然に對する人間の反作用を度外視すれば、意識のない純盲目的能因であつて、そう云ふ能因の交互作用の中に一般法則が働いてゐる……これに反して社會の歴史に於ては行動してゐるものは意識を賦與され、反省又は情熱を以て行動し一定の目的に向つて働く人間である」(フオエルバッツハ論)即ち社會の人間の意識的能動的行為に一の重点を認むる所に自然と異なる人間社會の發達史の特質が存在する。エヌ・ブ・ハリンもこれについて「社會には又實在的總體として、體系として相互に影響し合ふ要素、即ち人間が存在する」と言ひ、更にそれらの本質について「之等相互作用が無限に存在する事は前に見た所である、が然しこれら自ら軌り合ふ波、種々様々なる線を流れる無數の力、小力の一切は、それでも狂氣じみた踊りをしてゐるのではなく、一定の溝の中に流れ、内部の法則性に従つてゐるのである」と續けてゐる。従つて又こゝに注意すべきは社會の内部には一定の法則が存在して居り、かゝる「内部の法則性」こそ人間社會の複雑多様化する現象形態の本質的存在を明らかにするものである。かくして人間は一定の法則の下に自らその歴史を作り、而も意識を以て、目的を以てその歴史を作る。然しかゝる意識や目的は屢々偶然の様に見える存在に左右され、その現實化は屢々不可能であり、従つて「行為の目的は意志されてもその行為から生れる結果は意志されない」が如き、全く目的もなき、盲目的自然に於けると同様な状態に陥つてゐる。これは全く意識や概念そのもの、發展過程から説明する事は不可能であり、それには客觀的な歴史的に與へられた諸條件を持たねばならないことを最も明確に示してゐると云

ふべきである。ハー・クノールはこれについて次の様に説明を與へてゐる「ヘーゲルに依れば、一定の豫知された目的を現實化するには、種々なる現實の可能性と不可能性とがありうる。がこれらの可能性を現實化し、不可能性を除去するにどれ程成功するかは目的の成立に懸つてゐるのではなく、社會關係の内部の關係の總和に懸つてゐる。進化的事實は、最後にひたすら之等の關係の中に因果的に基礎づけられてゐる」と。即ちかくの如く、社會の發展の方向は人間自身の目的の成立如何に依存してゐるのではなく社會關係の内部の關係の總和に依つて制約せられ、規定せられるものであり、從て歴史の諸段階はそれに適應した社會の進化を齎すものであり、それは又意識の發展形式に依つて決定さるべきものでもないのである。

吾々は更に又歴史の發展過程に一種の必然性を發見する。既に述べた如く、人間自身の生活は常に不可避免的な盲目的動因によつて支配されてゐるが、それは正に、自己運動をなしつゝある世界の發展は全く人間の意識や意圖に獨立的に過程する事を意味する。而して我々の認識は感覺を通じてかゝる發展における運動法則の發見を齎すものであるが、これらの法則の必然性の十分なる認識は人間の自然への意識的服従を可能ならしめるものである。即ち「必然性は只そのものが把握されざる限りに於てのみ盲目的である」といふ事が出來、從つてそれが明確なる把握は又人間の自然への意識的參加の可能性を増大するものである。かくして又「一般に夢想さるゝが如く、自然法則の獨立してゐる自由があるのではなく、この法則の認識に、またこの法則と共に與へられてゐる。この法則を計畫的に一定の目的のために作用せしむる可能性に、自由が存在するのである」〔反デューリング論〕といふことは一般に自然法則のみでなく、人間自身の社會へも適用されるが

故に、即ち歴史上の諸現象間に内在する法則の必然性の發見に依つて、自ら盲目的原因を鮮明ならしめ、自由の可能性をより擴大するものであり、それと共に又「自由は我々自身及外部的自然に對する、自然的必然性の認識に基づいた支配に存する。從つて自由は必然的に歴史的發展の所産である」。

スピノザも言つて居る如く「或事物は、諸原因の系列が我々に隠されてゐるから、唯内的認識の缺如から偶然と呼ばれるのである」が嚴密なる科學的認識はやがてそれが必然性を規定する。かくして又歴史上に行動する人間は歴史の發展の一系列の中に不可避的に發生消滅する因果關係に依る必然性を、即ち歴史的必然性を發見し、而して意識的にそれが作用の方向を規定し得るのである。即ちこのことは人間の歴史に決定的な重要性を持つものであり、それは又人間自身による歴史の構成について最も重要な本質的意義を有つものである。

即ち歴史の諸段階を形成する歴史的必然性は一定の歴史過程に因果的に發生するものであり、それが正當なる把握をなす所に、人間の社會における實踐的な社會化された人間の行動に對する重要性が存在する。

更に社會の發展の究明は又次の事を明かにする。即ち人類の社會は自然の產物であり、その一部であり、而して自然との交渉に依つて對象を自然から汲み出した時にのみ、且つその制限、範圍の下に、社界の内容は存續し依存してゐるのである。このことは我々人間自らの生活が明かに物語つてゐる所であり、生活の物質的根據もそこに横はる。從つて社會關係の總和は、自然と社會との均衡の種々なる關係の中に制限され、

條件づけられてゐる。それと共に兩者の間における關係の變化は必然的に又、社會の歴史的内容の關係にも決定的な變化を惹起せざるをえないのであり、従つて更に其處には元の關係を否定する新しい關係の發生を見るのであり、かくの如くして歴史の發展は繰返へされるのである。かゝる關係は既に過去の幾多の歴史の社會的諸形態が明白に證明した所であり、かくの如く所謂「自然と社會との均衡」の絶えざる動搖と回復の中に、社會の、歴史の、發展の決定的基因が横はる事が發見されうるのである。而も兩者の攪亂と回復との過程は、人間と自然との不斷の闘争の過程——生産活動をなす——であり、又恒久的な一の必然的な運動の形態である。即ちこれらの事はこれらの過程に於て因果關係の裡に必然的に發生する生産の諸形態こそ歴史の諸現象の發展變化の方向を指示するものなる事を明かにし、従つて又自然と社會との均衡の諸關係こそ——そこに生産の凡ての諸條件が存在する——社會の、且つ人間の歴史の發展過程の尺度であり、その決定的起動的勢力である、と云はるべきである。

三

人間はその生活過程に於て——先きに少しくふれた如く——「一の自然力として自然素材そのものに對立し」自己の活動によつて自然素材を變化せしむると共に、又彼自身の生活をも變化せしめる。即ちそれは「使用價值を産出し自然物を人類の慾望のためにする目的活動であり、人類と自然との間における代謝機能の一般的條件であり、人類生活の永久的な自然條件である」即ちこれは人類と自然との絶對的な必要條件であり、

一つの自然法則でさへある。而して重要なことは自然法則は揚棄さるべきものではなくして、歴史的に變化しうるものはただ「此法則の實現される形態のみである」といふ事である。

既に歴史的諸段階を、又社會の諸關係を、一つの過程として、而も亦一種の必然性の下に於ける内的聯關性をもつ因果的合法性に依る發展過程として規定する事は、それらの諸段階に於ては、一定の異つた條件、原因の下には不可避的にそれに對應し條件づけられる各一定の異つた現象形態の發生する事を意味する。而してその諸段階に隨伴して存在する事象は各々異つた法則を生じ發展の過程を形成するものである。最早や一般的抽象的な規定は一つの無内容な規定しか意味しないことになる。單に存在するといふ事は一の空語であり、更に如何に存在し、他との如何なる條件、如何なる關係の下に生起消滅するかが重要な問題とならなければならない。即ちそれは「*Sein ist Wesen*」の謂ひである。それは存在の如何を、その存在の仕方、簡單にその存在性を意味する……我々に見ゆる存在は、一般に無限定な存在ではなく、つねに何物かとして、あるひは何者かの見地に於いて、限定されてゐる」(三木清氏)のである。

歴史の發展過程に於ても、その途上のある現象自体は、他との關係において如何に存在するかが重要であり、その歴史的规定を抽象し去ることは、それを超歴史的な偶像に化する事に外ならない。世界それ自体は不斷の過程を過程しつゝあるが故に、それは決して固定的な凝固物ではなく、それは又一つの自然と社會との均衡の動搖と回復との過程における全体的統一である。又個々の現象形態をそれ自体獨立的なものとして解することは、本質的な内的聯絡の様相の解決を不可能ならしめるものであり、従つて既に述べた如く

其處には現象の單なる多元的主体の間における相互作用しか問題となりえないのである。かくして既に(二)の結論に於て取扱つた歴史の發展過程の變遷轉化の方向の指針をなす所の起動的勢力に、一定の歴史的规定を與ふる事が重要であり、即ち推移する一聯の全体的過程の中において、人間の自然への目的活動、生産作用の一般的法則の實現される諸形態の究明をなすことは初めて具体的な明確な規定を齎らす所以である。

この事は與へられたる避くべからざる緊要な任務ではあるが、更に、一般に所與の對象に關する歴史的规定をなす事が必要であり、それを無視することは、對象の内容を全く空虚な粗雑なるものたらしめ、從つて又問題の本質の重要性は隔離されざるをえないのである。問題となり對象となりうるものは「一定の社會形態である。即ち生産業の比較的大なる又は比較的小なる總体の中において活動する所の一個の社會的主体に外ならない」のである。

かくして又歴史上に生起する諸種の現象形態は決して一般的な規定をのみ持つものではなく、常に一定の限定され、制約された社會の下に各々異つた一定の條件を保有して居り、これらの環の連鎖が歴史の發展過程の諸段階を形成するのである。從つて一の歴史的阶段において普遍と特殊との關係を明かにし、一定の歴史性を見出しそれらの關係を的確に規定することなくしては、常にその本質の把握は不可能ならしめられる。即ち歴史の發展の諸段階は、その不斷の對立の闘争の間における變化推移の過程に依つては常に複雑多様な特殊性、異つた歴史の諸條件を齎すものであるが、これに對して單なる一般的抽象的规定を以てする時は、かゝる具体的な特殊性の本質は全く抹殺されて只概念に依る規定のみが残らざるをえない。かゝる方法にお

いては、發展の過程における豊富なる存在重要な意義を有する特殊性の凡てが失はれざるをえない。ヘーゲルはこのことに對して暗示的な言葉で以て次の如く言つてゐる。「生の性質のうちに躍動してゐるところのものは、觀念の靜寂のうちに沈黙し去り、千重の装をなせる驚異のうちに現はれ來る所の、生の性質の溫かなる無盡藏は乾燥せる形式のうちに暗鬱たる北朔の霧にも等しき無内容の普遍性となつて凋んでしまふ」と。

即ち歴史の現象の如何なる過程もそれは普遍的法則の下にのみ規定されるべきものではなく、眞の規定は、常に變化する過程の生ける現實性の具体的現象の中に規定されるべきである。まことに現實はその均一性、同種性にも拘らず無限に複雑化し錯綜混亂を來してゐる。從つてデボーリンの言ふが如く「普遍的法則性そのものが具体的な事態に於ては或る變じを蒙るものであり、これに依つて現存せる『環境』の特殊なる諸關係の全系列に對する法則性が明かにさす。具体的な顧慮なしに普遍的な法則性を引合ひに出すことは不可避的に吾々を形而上學的に抽象的な結論に導く」のであり、即ち普遍的な法則性の下に「常に一定の時代の、一つの階段又は一つの時期の諸現象の特質を觀察し、且つこれによつて現象の鎖におけるかの最も重要な特殊な環……を把握すること」が最も具体的な眞理を作る一基礎である。

かくして又、——價值關係について云へば——世界を、歴史をかく解するものにとつては一定の社會——それは一定の歴史的条件を内包する——にとつて合理的たりしものも他の社會に於ては不合理となり、社會の一定の發展限度に於て自己の存在の價值を常に變化せしめる。而もそれは人間の意圖、意識に獨立した一の歴史の必然性を以て規定せられ、從つて歴史的に制約された一定の時期、一定の社會關係に伴つて自己の價值

關係の轉倒を來すものである。即ち一の歴史時代において歴史的な必然的な特殊の關係をもち重要な役割を遂行したのも、やがてその歴史使命を果した後は、從來向上の推進力たりしものが、障害のそれと變化し、従つてそこに必然的に價值の顛倒が生ずるのである。時間的空間的の一定圈内より他の圈内への推移によつて價值そのものが自ら變化を蒙らざるをえないのは必然であり、歴史の進化は既にかゝる事實を明かに示してゐる。それは又一般的法則も具體的な事實の下に於ては或る變化を來さざるをえないが故に、即ち種々の特殊性をもつ諸形態は各々の過程において常に變轉推移するが故に、従つてそれらの存在理由も變化することに依つてかゝる價值の顛倒も自ら生ずるものである。然るに單なる一般的規定の下に於ては、かゝる具體的特殊的形態は既に述べた如く正當に理解し能はざるを以て、一定の歴史的條件の下に限定される歴史的に重要な價值關係も自ら又しても觸る能はざるをえないのである。一定の歴史的使命を持つて人間社會の道程にあらはれる歴史的形態がその使命を果して存在の理由を失ふに至るや萎滅し、新らなる生氣ある形態がこれに代つて來る。即ち社會の發展過程の途上において、曾つては實在性を有せしものも、やがては非實在的な存在となり、自己の必然性、存在の合理性を失ふ様になるのである。歴史の各段階に於て其處に存在するものはその發展の道程中に必然たる事を證するのではあるが、やがてその段階に於て實在性をもつ自体の胎内に新らたなる高級な諸條件が發達するにつれて自らその存在の理由を失はざるをえないのである。

こゝに各々の歴史時代に存在する特有な使命諸條件は一聯の諸形態の道程に全く重要な役割を持つことが知られ、問題とすべき對象の中にこれらの存在を輕視することは——意識にせよ、無意識にせよ——全体的

なる問題の解明を雲霧の彼方に消失せしめることに外ならないのである。歴史性の抽象は究局に於て諸現象形態の永遠性、固定性を物語るものであり、それは又歴史の終局を意味するものである。然し世界の現實の運動は正にこれが無意味なることを明かにして居り、生々とした生活の潮流は、より一層高級な過程へと歴史を作りつゝ、あるのである。世界の不斷の絶えざる進化は、自己の内に矛盾を内包しつゝ、常に對立的闘争のうちに、より高度な段階へとその過程を歩んでゐるのである。即ち世界は、ヘーゲルが既に「總ての事はそれ自身矛盾してゐる」といひしが如く、矛盾の運動であると共に更に又その中に於て常に統一の過程を齎しつゝ、あるものであり、即ちそれは對立物の相互間における辨證法的統一の發展形態をなすものである。生ける生活の潮流は眞に汲み盡し難き存在である。『それ故に人間の認識は常に近似的に正確なる世界の反映に過ぎない。人類はその歴史の過程において、客觀世界に該當した認識、絶對の認識に絶えず近づく。けれども我々の認識は、しかし絶對に近づきうるにしても、而かもなほ依然として相對的である』(デボーリン)かくして我々は、人類の歴史は、その相對的發展の中に、一定の歴史的條件を齎しつゝ、一より他への推移をなす過程なることを見出すことが出来る。それは又單なる動的な過程と言ひうるばかりではなく、各段階はより高級な過程へと發展する辨證法的發展の過程をなすものであり、其處に又各々異つた歴史性が、重要な意義と任務を持つのである。

私は今簡単に——眞に粗雑に過ぎぬ——歴史の發展過程の理論——それは又極めて部分的にしか過ぎないが、更に紙數の制限はこれ以上の展開を拒否する——の究明を試みたが、それは所謂歴史學派とは何等の共

通点を持つものでない。即ち一定の範囲内における歴史の過程あらゆる現象を蒐集歸納を事としては極めて歴史的な特殊圏内に於ける理論のみに重要性を認めんとする歴史學派の傾向は、又嚴密な検討を要するものである。

彼等の主張する所は、新歴史學派のシュモラーの言つてゐる如く、それは「一般化することをより急がないこと、個々の時代、個々の國民と個々の經濟狀態との特殊研究に通ずるため廣く涉獵される事實の集大成に對し、より強き欲求を有つ」ことであるが故に、自ら必然に全体的な統一的な過程への理論的研究を回避する。殊に現今の如き社會的組帶の極めて重要性を持ち、社會關係の範圍が擴大され、それらの間に特に密接な聯關性をもつ世界過程において、特にその實際的役割は問題でなければならぬ。宜なる哉、既にハインリヒ・ハイネはこれについて嘲笑的な言葉を以て次の如く歌つてゐる。

北へ行くな

ツウレの彼の王に氣をつけよ

憲兵と巡查と

全歴史學派とに氣をつけよ

と。單なる歴史的事實の集積や、經驗的事實の下における個々の特殊條件のみに問題の基礎を求める事は、全く全体的過程の發展の内的特質を見誤るものであり、又しても必然的に樹を見て森を見ざらんとするの傾向に陥るものである。對象について重要な事は全体的過程に對する、個々の特質を分析究明すると共に、兩

者の間の關係の性質を一定の歴史的條件の下に嚴密に把握し規定することである。

——一九二八・五・一五——

附記。これは私の貧弱な粗雑な一の覺書であり、又單にそのみに止る、そして又内容の凡ては私達に投ぜられた今後の問題に属する。

歴史理論に關する二、三の点、歴史の因果關係や歴史的條件の重要性等について筆をとつて見たが粗雑なる智識は十分なる展開を妨げる、寧ろかゝる内容を取扱はんとすることこそ、而かも、かゝる制限された小論において僭越な企圖かも知れない。散在する哲學的博引傍證は全く好む所ではないが、筆者の理論的構成の未熟が余儀なくも、斯くせしめたものであり、更に諸兄の御教示と批判を待つものである。

砂丘の樹かけ

乙 村 修

葉枝、枝葉を吹きすぎる微風の音にさそはれ
いつしかに思ひほうけて

こゝの緑りの木の蔭に うつら、うつらと揺籃の唄をきく心地

五月の晝は

アカシアの葉かげに咲いた花の白さに わけなくも偲ばれる過去よ

その花は 花葩の白さは

童ころのひとつの夢に

あの夢に

いつの日に どこで見たのか 今はもうとづくに忘れた記憶のかげに
咲き出でておぼろにはふうつ、ないもの

この砂山の

和やかに洩れ日する樹かげにまで

風にはこぼれて来る杳かの海の浪音にすら なほ夢見ご、ちに誘はれる日よ

Mai 1928

孤 影

音とてはなく しのびするごと 雪のひら 雪のひら

見えざる空の片隅のいと冥きに出でて

ひきつぎ絶えずかげぞ降らすに

地は昏く さながらに これ闇かとも

わが世ぞ まこと 闇かとも

冬の木の 葉枝うちひしがれて立ち並ぶ地平のあなた
見えわかず わがゆく道のありや無しやは

さるを　ともしびのひとつだに手にとりがたく
うなだれて　迷へる影の孤つこそわが相

Fevrier 1928

陽　　春

啓示得て　われ手をぞ伸ぶ
雙手のふ　上空にさし……

たなごころひらけばふしぎ　光の出でて

片手なる五本の指の　おのおののさきよりは　五すぢの光りのび

片手なる五本の指の　おのおののさきよりは　五すぢの光りのふ

と　見る間なく

十すぢのひかりもろともにひとつとなりて天へと向ふ

天　まろく地をつゝみ　清らに青く

のぼりたる光り聚り陽とはなる

してや　また　われ　息吹せば　ふかしぎや枯れ枝に花

Mars 1928

うつゝなる哀しみ

うつろひて早やも散りしか

そのかげに　われ　はかなきを夢に戀ひ

ひとときは　酔はむこゝろも願ひしを

あゝ　かたときの花よ　さくらよ

かの色の仄かに紅き

かの薫りかそかに甘き

もろともに　わが頬をそめ　わが胸をまで匂ひしが

かたときのさくら木の花――
いまはこれ失せ果て、こそ
はかなきは夢にはあらで現なり

Avril 1928

永遠への道

これぞ 高きに昇る長き道はし
ひとつ ひとつ をば踏み踏み
かたときと
また ひとときと
絶えてとまらずまで いそしみのぼるこそわがつとめ

さりながら
この道の いづくにまではつぎゆくかや

きみよ きみもまたわれがともがら
ひとたびは このきざはしに足かけて
云はんかたなき苦しみにまた樂しみを知れたまふ

高きところに 美はしきものを憧憬れ
ひとあしと
また ひとあしと
もろともに手をぞとり合ひ いざやすまむ

Mai 1928

救ひなき風景

行きずりの子供どもにもみ棄てられ
埃のつんだ木の葉の下に
いまはたたりと垂れさがりよちれて死んでゐる鞆たもと

ペンキの剥けた白い公衆椅子に
 晝間の懈怠がぐつたりとねそべつてゐるばかり

青草の上に身を投げやうにも

砂のはこりに 新らしい夏のズボンがよごれやうし
 何處をわたる風もなく

ひらひらと洋書の頁をめくり反す氣力もない

これは救ひなきけふの風景
 われのみひとりよき眼をもてばとて……。

Mai 1928

海 邊

河 内 勇 三

海に來たる
 われ砂丘に立つ。

色淡き晝顔の
 花咲きむらがりて
 海の、いやはての
 はてより來たる
 このそよ風に
 さゝとゆる。

見張りて
 海の上を遙かせば

片帆点在し
海は遠く雲もなし。

見よわが心

ひびきを聞く……

あゝ、おぼゆ

今おぼゆ

幼かりし日に

かくてありき――

――わたつみの

緑色濃き眺めつ、

われは過ぎけり。

懷古の情

ひし／＼とせまる中に

何處も同じ

海の匂ひに

再びわれは、深く

息つき見下せば、

漁士たち

白き砂に圓坐し

煙草しつゝ、何か語り、

や、離れ

若き娘

赤き帶しめ

敷きのべし帆に坐り

網を繕ふ。

まろく坐りなして

語り又答ふる如くなれど

われには

その言の葉取れず。

風のためにか？ はた
出で行きし
息子等の漁、氣づかひてか
静かに語る見えて
砂に吸殻吹き落しぬ。

ふと思ひ得て
又見遙せば
はるか／＼
沖にも
波は小さく
光りて
白く輝き
風はやまず
吹きて
わが耳に鳴れり。

海よ！ 呼ばんか、
われに答へよ
あゝ今
われは立つ
來りて
海の丘に。

砂洲を渡りて

高村 榮

Sunset and evening star—Tennyson.

夕陽は落ちて長庚はためく
 吾を呼ぶはがらはがらの一つ聲。
 砂洲になごりの風きてんや
 吾や海面に船出する時。

さはれ轟ぐかの干満
 満ちては波のいさ立たず、眠るが如し。
 限りなき永遠の深淵より來し者の
 又や深淵へと歸る時。

黄昏れて入相鐘の音寂れ
 ぬばたまの闇夜ぞ來つらん、其が後に。

老 齡

一九二八、五、二五

されど別離の悲哀無かれかし
 船出の折に。
 處 時のけちめを越えて遙けきに
 千里の波に 浪のまに
 吾は行くとも 砂洲渡る時
 吾は見ん導者の顔まのあたり。

私は詩に問ひました。

”ほんとうに私はどしよりなのか若いのか”
 ”笑つて歌つて居るうちは

I Questioned Poetry, "Say", I said, — Davies.

あなたの心は若いのです” 彼女は笑つて言ひました。

”私はとしよりなのか若いのか。”

私は哲學に尋ねました。

”女達がお前を見やるその眼付きが

お前に答へて呉れるだらう。” 彼は咆える様に言ひました。

それで私は胸おどらせて

未だに若いあのしび生活を求めた時

女達はそしらぬ顔して

私の愚を責めました。

一九二八、五、二五

短歌會詠草 (入選歌)

(五月十四日夜
ことぶき亭にて)

矢 浪 久 雄

街角で手品をしてた支那の子はこんな晩には
どこでねてるか

乙 村 修

せまりあへる丘の簗^{なまむ}夕映えて風立つ程をひた
にさやげり

小 森 政 俊

草丘のそがひによごむ夕かげのうちにいねつ
つわが歌ふかも
こまやかに茂り葉照れる青梅の熟れなつかし
もつゆばれの朝

夕かげる木末葉末をはつはつに風過ぐらしも
丘ぞひの路

矢浪久雄

あのひどは今晚のよな雨の夜に火の玉のよに
尋ねて來たが

加藤正男

和歌よむにさびしさまざる雨のくれ思ひにな
やむ胸をいかにせん

乙村修

狭間路に身をしかづめて手に掬ふ水はも清し
山の出で來も

淨世

谷田明

菓子箱の捨て場に困る居候
半分は手で朝鮮人教へられ
失敗のナニこれからがよく續き
いゝ事に子供は轉んでほめられる
風引いてそれからマスクかけ始め
ねたふりの子供「菓子よ」に早い事
なほらぬへ養生が悪いとそりかへり
このところはつてならぬとはつてあり

初春より暮春まで

元日や友も賓客の姿にて
ひやうしぎの響の氷る夜寒哉
山眠る川一筋のいびき哉
讀經の聲もかそかに雨の音
棹をさす船迂りゆく春の川
我が影をくづし静かに手綱入る、
簑着たる人を繪にする青田哉
春日永燕も見たり宵の街

炭 焼

青 木 秀 雄

彼は目が醒めると、大きな欠伸を二つし、狭い小ぼけな小屋の天井に悶える許の脊伸をして、やがて米と鍋を持つて入口の蓆をまぐり SLEEPING COTTAGE を出た。

まだ夜明け前の深山の爽快な、寧ろ薄ら寒い空氣が、今暖い小屋を出て來た彼を逸早く包んだ。彼は無意識的にその新鮮なよき空氣を呼吸する爲に、少許はその入口に立止つて、やがて斷崖を上から下に走る小徑を辿つて、元氣よくトントントンと雜草を蹴散すやうにして谷川に降りて行つた。路傍の雜草に宿つて居る露は、素足に尻切草履を突掛けた彼に快い感觸を與へた。青く瑞々しい雜草に取り挾まれたその道は、白く黄色く褐色に浮立つて見える。

突兀とした此の邊り並びに上流地方の山脈から流れ出て來た谷川の水は、ゴツゴツと角稜の尖つた大きな岩小さな石を運んできて、其處には小さい乍らも一寸した河原がある。水は勿論澄んで居て底の砂利が大變淺く見える。鰻が樂し氣にツイツイと走つて來て又去つて、岩間の暗闇の中につと身を隠す。

また太陽が出ぬ。谷々の上扱ては峰々の中腹には、深い濃密な霧が立ち罩めて居る。

彼は河岸に蹲つて、河水でゴシゴシと米を四五度炊ぐや——その間中虻を初め大きな蚊無數の細いオロロに、彼は絶えず悩まされる——やがて無造作にその鍋を下げて小屋に登つて、隅にしつらえてある小さなごつい圍爐に掛け、彼は炭に火をうつした。圍爐の周囲に並べてある彼の使ふ炭は、皆出来損ひの炭ばかりで、汚い褐色をして居て、燃えうつる時に窒息させむばかりに、嫌な匂の煙を煙らす。火が相當燃えうつると、彼は其處を其儘にして又 SLEEPING COTTAGE を出た。

今度は先刻と反對に少し登り氣味になつて斷崖を横切つて居る小徑を歩いて、風を避ける爲に一寸した落葉樹林の中に造られてある炭焼小屋に向つた。

夜が次第次第に明けやうとして、東の空では明るい蒼色の輝きが漸次に増してゆき、今迄の濃密な霧は薄くなつて、明るみを帯び、やがて廣い大空の中に消えて行かうとして居る。霧も晴れ始めて居たのだ。

彼は炭焼小屋に入つて仕事を始めた。先づ片隅に積み重ねてあつた櫟ホーサ等の木の幹の太いのを、炭焼竈の中に入れた。火は一寸も無いのだが、此處數十年來の何とも言はれない親しさの満ちた溫氣がその中にあつた。次に幾分細い幹をその上に尙も積み重ね積み重ねた。それから彼は辛棒強く竈の入口に火を点けた。然うし終るのに可成長くの時間がかつた。

その間に太陽の最初の光線が、霧を劈いてバーと光を放つて、霧はもう殆ど霽れて居た。下河本流の水の上のすばらしい山脈は、仕事に一寸倦んだ彼の眼には氣持よくうつつた。直ぐ炭焼小屋のはどりに、山藪岩鏡が咲いて居た。

かうして色々の彼にとつて大切な仕事を、一先づ終えた後、彼は途中ローカル・カラーたつぷりの小曲を口吟み乍ら SLEEPING COTTAGE に歸つた。

小屋の中に新しい空氣を入れる爲に、入口の蓆をガサガサと上に巻揚げて、そのてつべんにある繩で一寸からげた儘にして中に入つた。炭はもうカンカンと赤熱して、その上につるしてある鍋はブトブトと盛に蓋をもたげ呼吸をして居る。日がすっかり明けて仕舞ふと、今迄無數に小屋の外をブンブン飛び廻り、餌を捜して居た虻オロロ等の蟲類は、何處へ行つてしまつたのか、すっかり影をひそめてしまつて居た。

彼は入口に置いてある食器、濯木を鉋で切つて作つた箸、而して其横に在る入物から大きく切つてある漬物を五六片出すと、圍爐の前にドツカと座つた。彼は飯を食器に移してやがてムシヤムシヤ食ひ出した。飯は少しこげたらしい、だが彼は其等が大變美味をうな食方で盛に食つた。

少許経つて、彼が食器に湯を注ぎ込んで、サラサラ食ふ頃には、向の炭焼小屋の藁の屋根の上からは、混亂した雲の様な煙がボーとあがり、やがて眞直になつて空に昇つて行く。

「うまく燃えたらしいナ。」

彼は言つた。

戯曲 小驛スケッチ (一幕)

宮川正澄

時。現代。——公設職業紹介所の建たざる以前。
場所。日本の或る小さな停車場。

人物。

四十男。

口入屋。

若い薄命の女。

旅客。驛員。線路工夫。

舞台。

右手旅客待合室。その奥がガラス窓を隔て、事務所になつて居る。中央に改札口のある可成り廣い

出入口の土間があつて左手に線路工夫詰所がある。

背景一面は森林地帯でその間を縫つて居る鐵道線路は見えないが、雨のためびしょ濡れになつた赤い信號燈が樹木の間から顔を出して居るのがくもつた事務所のガラス窓を通してぼんやりと見られる。

事務室には驛員が一人居て丹念に電信を打つて居る。しかし驛員の姿はみえない。待合室にはついに先に出發した汽車から降りた乗客だが、一人の四十代位の男が腰掛けて居る。

外には雨が降つて居る。

遠くから絶えず汽車の音が聞えて来る。

午後十時二分。最終列車十五分前の情景。

幕開く。若い女を連れた口入屋が登場。

四十男。(顔を上げて口入屋を認めて) よお。福田ぢやないか。

口入屋。あ。橋本か。珍らしいな。どつか行くんか。

四十男。何。行つて來た所でさ。例の裁判の一件でな。

口入屋。あ。あ。今日は判決の日だつたな。あの男も可愛想な事をしたがそれで結果はどうだつた。

四十男。それがさ一年四ヶ月と來たんだ。

口入屋。矢張り執行猶豫にはなれなんだわけだな。

四十男。つまり、さう云ふわけさ。どうも彼の男の態度が裁判長の氣に喰はなかつたらしいよ。

口入屋。成程。俺もさうだらうと思つて居た。彼奴碌な分際もしないで頭が高くてあかんさ。あれだつたら誰の同情だつてありつこない。俺の内へはよく仕事をたのみに來たもんだが、あんな人を食つた様な横平面には此方が眞身になつて世話する氣にはなれんがな。

四十男。そうだらうとも。裁判長も悔恨の見込が更になしとか何と云つたがね。實際。彼奴の面を見れば言葉を聞かないでもそんな氣がする。

口入屋。損な男だな。貧乏人に生れたら貧乏人らしくへえへえ頭を下げて居りやあいいのに、すべこべ面立をするから時計一つでこんなことになるんだ。

四十男。そうだよ。食ふに困つてつい出來心でやつた事だから、今迄の生活の有様とか家の貧乏な事等を細細と訴へて裁判長大事に拜み込んだら、幾分かの斟酌もあつたらうに、てんで彼奴はそんなことにはおかまひなしで他人事の様に反り返つて居るんだ。

口入屋。馬鹿な奴だな。二十五にもなつとつてまだ分相應の世渡りを知らないなんて大變な貧乏もぐらもちもあつたもんだ。このせち辛い世の中にあんな奴が貧乏人の家に生れるなんてひどい桁異いだ。

四十男。全くだ。時に君はえらいめかしとるが何處へ行くんだ。

口入屋。俺か。何。北海道に一寸用事が出來てね。

四十男。北海道に。驚いたな。本當かえ。

口入屋。ハハハハ。嘘だとして置いてても差支へないが。

四十男。引き延しちやいかんぞ。ぢや本當なんだな。

口入屋。ハハハハハ。

四十男。可笑しい男だな。はつきり云へ。北海道の何處へ行くんだ。

口入屋。さうむきに聞かなくてもいいさ。小樽よ。

四十男。小樽。は、は。ぢあ。何かいい玉でも轉り込んだつて云ふわけだな。

口入屋。さう行つたら好いのだが。所が今度は途方もない瑕玉で…………。

四十男。へへへ。好く云つてら…………。

口入屋。いや。本當だ。あこに居るよ。彼奴だ。(入口の柱にもたれて居る女の方を指示す)

四十男。(女を認めて) 連れて來て居るんだな。おや。すてきな別嬪ぢやないか。へへへ。君も隅に置けない男だな。うまい汁を吸つて居らあ。

口入屋。馬鹿。よく見給へ。顔の色をさ。彼奴は肺病だよ。而もひどいと來て居るんだ。

四十男。(見直して) 何程。そう云へば青い顔をしとるが…………。(又感心した様に) しかし別嬪ぢやないか。

口入屋。當り前さ。あれで顔まで並と來られちや商賣にはならないさ。

四十男。拔目がないな。時に何かえ。下向きかえ。上向きかえ。

口入屋。下向きに決つて居らあ。

四十男。

しかし。可愛想だな。弱々しい身体をしとるが。

口入屋。

だつて。仕様がないうちやないか。教育は受けて居るがこれと云ふ技藝はなし、とる年はとつて居るしさ。あれで二十五だよ。

四十男。

さうかい。それで親でもあるんかい。

口入屋。

両親ともなしさ。父親はついこの間死んだのだが、何でも昔は陸軍の主計大尉だつたつて事だ。成程。すると相當な内だな。それがどうしてかう零落れたんだ。

四十男。

口入屋。

それがさ。その大尉てえのは例の十年程前の陸軍の△△事件に掛合つて首になり監獄にぶち込まれた白者^{しろもの}なんで、其奴が出獄後世間に顔向きがならないと云ふので、紀伊とか何處とかの山奥に隠れちまつたんだ。つまり此奴は軍人の監獄を潜つた奴の昔からの御作法と来て居るんだがね。

四十男。

其奴は謹慎するつて云ふんさ。

口入屋。

所がその謹慎がその大尉の野郎を態^{てえ}よく狂犬^{きやういぬ}にして仕舞つたのさ。つまり其奴が餘り鬱ぎ過ぎて、色んな事をくよくよく考い過ぎたばかりに、其奴の頭が出来たてのすい／＼の腫物の様に神經過敏でひれ／＼して來たんだ。そしてその揚句に到頭其奴は正氣を無くしてしまつて、貧乏神と一緒に手當り次第に暴れ出したんだ。

(この間女は一寸待合室の談話に耳を傾ける様な表情をする)

四十男。

成程。そして到頭死んぢまつたと云ふ譯か。其奴あ自業自得と云ふもんさ。

口入屋。

所がさう濟されないのがそのとばつちりだ。と云ふのはその妻君と云ふのがその野郎の狂態を苦しめて、何でもその野郎が死んだ三日程前の事だが、井戸の中へ跳び込んで自殺しちまつたんだ。そいつが君井戸の水が腐くなる迄誰も氣がつかなくつたて事だが、何でも引き上た時には腐爛して居たて事だ。かうなるとその妻君が可愛想なばかりぢやない、そんな死體を井戸の中に製造してさ、その山里の人々にや大した迷惑だ。

まだ、そればかりぢやない。その野郎が死んぢまつた後に残つた娘の彼奴を一寸見給へ。いい物笑ひぢやないか。山籠^{やまごも}りと手荒い父親^{おやぢ}の責^{せつ}檻^{かん}のために、とんでもない肺病やみになつて仕舞ひ、さてはこの俺の手を厄かせて、北海道くんだりまでお流れた。そしてその行先はどうかと云やあ、見苦し筋^{すぢ}をすつと行く跡々に引張つて世間を毒するのが落^{おち}た。

四十男。

ハハハハハ。成程ちと鹿爪らしい事を云ふな。だが、さう云ふ手輩が世間に殖えりあ、君の方の商賣が繁盛するぢやないかい。むしろ君は感謝すべきだよ。さう云ふ手輩に。

口入屋。

馬鹿を云へ。いくら商賣が商賣でも、もうこんな知識階級の掃き捨てなんかは此方^{こちら}の商賣にや大禁物だ。何故で、君さうぢやないか。自分の力で生きて行かれない様なしみつたれだ、まをして理窟を云はすれば人一倍につべこべ拔す高等遊民位仕様のない物はないさ。大体此奴等は口が乾せ上り、腹がグウ／＼鳴つて居ながらも、尙丁稚奉公がいやだ、やれ女中奉公が賤業だなんて嘯^{さへつ}りあがるか、可笑いぢやないか。今の奴だつてさうだよ。かうして因果を含めて大人しくついて來さす迄には、

俺の氣苦勞は竝大抵ぢやなかつたんだぜ。と云ふても分るまいが、實際彼奴を説教するためには正目三日三晩を綺麗に棒に振つちまつたんだ。だつて其奴の初めの言分が小學教師と來たんだぜ。これにはもう俺は魂消ちまつたよ。幾らなんでも俺の所へ來て小學教師とはちとお門違ひぢやないか。しかしまた身体が丈夫で、つとした後見人でもあるならお門違ひはお門違ひでかまはんさ。それが君あんな肺病やみが而も全く身寄りのない分際をして居て、教員とは聞いて呆れるぢやないが。で俺は一層斷つちもはうかと思つたのだが、顔に幾分買はれさうな所があつたもんだから、馬鹿な眞似だが、手放しかねてこんく其奴不當な事を説いて聞かせたんだ。所が彼奴も幾分考へたと見えて小學教員は思ひどまつたが、次の言分は看護婦と來たんだ。

四十男。

ふん。妙な物になりたがるね。

口入屋。

これも頭が高い精だよ。で俺は又説教したんだ。この時には本當に俺は彼奴の物の分らんのに腹が立つて來たよ。しかし、どうにかかうにか最後には女中と云ふ所まで承諾させたがね。全く彼奴のだ。だには俺はすつかり根も氣も盡きて仕舞つたさ。

四十男。

ふふん。君も大分あの女の顔を高く買つたな。だが、あんな病身をどう動かさうてんだい。北海道まで連れて行つて。

口入屋。

さあ、そこが問題なんだ(急に聲を落して)實は、北海道へ行つたつて、あんな奴を女中に備つて呉れる家なんか一軒もありやしないさ。又、假にあつた所で、たかが女中さんのお伴をして北海道行

きとは、此方の算盤には合はないぢやないか。

四十男。

へへへ……どうせさうだらうと思つて居た。

口入屋。

何。初めからさう云ふ心では無かつたのだが、彼奴餘りわ、かりが鈍いから、つい癢にさはつて一層途中で賣り飛さうと思つて仕舞つた譯さ。

四十男。

へん。君も大概の惡人だな。

(女神經質に聞き耳を立てる)

口入屋。

しつ。さう大きな聲を出すなよ。俺も好きこのんでするんぢやないからな。

(この時旅客である住職、小學校教師、百姓登場)

百姓。

いや。何のかのと云ふて今年は近年にない豊年でござんしてな。

小學教師。

さうですかい。それは結構なことですな。私の方もこの頃は景氣がよくつてね。まあ月給が殖える子供が生れるししてね。ハハハハハ。

住職。

それは、いづ方もお目出度いことぢや。愚僧の所も此頃は金持の檀家が殖えて、まあ、お布施もたんとしただけと云ふもので、ちと温泉場なりと覗いて参ろうかと思ふとりますのぢや。

(驛員登場)

驛員。

皆さん。後七分で汽車が到着します。御用意を願ひます。

(遙か彼方から汽車の近づく音聞こえる。小學教師。住職。百姓何かがやゝ喋りながら切符を買つ

てプラットホームに出る―退場―

口入屋。 ぢや。橋本。失敬するぜ。

四十男。 うん。さうか。まあ無事で行つて来い。

(四十男巻煙草を一本出して何かぼんやりと考へながら手先でいちくり出す。口入屋は立上つて出入口に出る)

口入屋。(女に)

おい。また鬱いで居るな。どうしたつて云ふんだ。いゝ加減にしろよ。本當に。仕様がなぢやないか。さあ汽車が来るんだ。俺は切符を買ふから、手荷物を一寸かためて置けよ。

(きゝとれない位なふるへ聲で) はい。

(口入屋切符を買ふ。女はもぢく二つの信玄袋をいぢくつて居る。彼女の足先はふるへて居る)

口入屋。(切符を買つて)

さあ信玄袋の大きなのは俺が持つから、お前はこの小さいのを持つて行きな。

(頷く)

口入屋。(大きな信玄袋をかつきながら)

ちえつ。いやな顔をするない。気分でも悪いのかい。

女。(小さな聲で)

いゝえ。ただ……ただ……

口入屋。 だだどうしたつて云ふんだい。

女。(泣き出す) ただ少しばかり頭痛がしますので……

口入屋。 えゝ。泣き出しあがつて。やめろい。みつともない。

女。

(尚泣き續ける)

(四十男待合室から皮肉に一寸と上眼使ひに見る)

口入屋。 さあ出るんだい。(背後から女をおす。二人プラットホームに出る。―退場―)

(汽車の音益々大きくなる。)

黒幕靜かに下る―十五分間經過を示す―勿論この間に汽車はこの小驛を通過したのである―

幕上る。

四十男元のベンチに腰をおろして顔に何か考いて居る。手には最前の巻煙草がひどく揉みつぶされてある。ジイ／＼云ふ電信の音たえずして居る。遙か遠くで先刻出發した汽車の音がきかれる。

――この間四分經過――

突如電話のベルがけた、ましくなる。驛員あはて、登場。事務室に馳け込む。

驛員。

(電話の受話器を耳にあて、) ははは。え? そうです。え? 飛下り自殺ツ。それで……ははははは。若い女の乗客……。當驛から一哩半の鐵橋附近の地点……。ばはははは……。え? 片脚が汽車に残つて居る……。ははは……。かしこまりました。すぐに驛長に知らせて調査します。さよなら (電話を切る) 驛長。驛長 (叫ぶ) (退場)

(舞台裏は急に騒がしくなる。カンテラを持つた線路工夫が三人あはたしく何か叫びながら舞台を

横切る。カンデラの光は森の蔭にかくれる。遠くから「やあ血だ」「引つ張られたんだ」等と云ふ工夫の叫び聲が聞える。

(四十男。立上つてその方を茫然と見て居る。)

四十男。(眩く) 到頭やつたか。……成程。ふん。ふん。

静かに幕

一九二八、五、一〇

昭和二年度北辰會費收入支出決算

収入ノ部

科	目	豫算額	決算額	比増	比減
經常部					
第一款 會費及入會金		八、五七〇・〇〇	八、六四五・二〇	一〇八・二〇	〇
第二項 通常會員會費		七、〇七〇・〇〇	七、七九・〇〇	三・〇〇	〇
第二項 入會金		六、四三三・〇〇	六、四四九・〇〇	一六・〇〇	〇
第二款 特別會員寄附金		一、七五〇・〇〇	一、七五五・〇〇	五・〇〇	〇
第一項 普通寄附金		七一〇・〇〇	七一〇・〇〇	〇	〇
第二項 資金部寄附金		五一〇・〇〇	五一〇・〇〇	〇	〇
第三項 用途指定寄附金		三〇・〇〇	三〇・〇〇	〇	〇
第三款 預金利子		一四〇・〇〇	一四〇・〇〇	〇	〇
第三款 預金利子		一三〇・〇〇	一六六・三〇	三六・三〇	〇
收入合計		八、五七〇・〇〇	八、六四五・二〇	一〇八・二〇	〇

支出ノ部

科	目	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	残額
經常部						
第一款 各部經常費		七、九七五・〇〇	七、三三三・一〇	〇	七、七三〇	六、四三六・〇
		五、七一一・〇〇	五、三二一・一〇	一〇・四〇〇	一八・一三〇	二八・二六〇

支出合計	八五五・〇〇〇	七六九・一〇〇	〇	〇	六四四・九〇〇
第三項 庭球場改修積立金	五〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇	〇	〇	〇
第四項 競技場改修積立金	三三・〇〇〇	三三・〇〇〇	〇	〇	〇
第五項 端艇建造積立金	二五・〇〇〇	二五・〇〇〇	〇	〇	〇
第六項 艇庫新築積立金	五〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇	〇	〇	〇
第四款 運動會用具補充費	一五〇・〇〇〇	一五〇・〇〇〇	〇	〇	〇
臨時部	五五〇・〇〇〇	五五〇・〇〇〇	七・五〇〇	〇	一・五〇〇
第一款 各部臨時費	五五〇・〇〇〇	五五〇・〇〇〇	七・五〇〇	〇	一・五〇〇
第二項 弓術部費	二五・〇〇〇	二五・〇〇〇	〇	〇	〇
第三項 劍道部費	二五・〇〇〇	二五・〇〇〇	〇	〇	〇
第四項 庭球部費	一〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇	〇	〇	〇
第五項 野球部費	五〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇	〇	〇	〇
第六項 旅行部費	四五・〇〇〇	四五・〇〇〇	〇	〇	〇
第七項 漕艇部費	四五・〇〇〇	四五・〇〇〇	〇	〇	〇
第八項 競技部費	六八・〇〇〇	六八・〇〇〇	二・五〇〇	〇	二・五〇〇
第二款 水泳講習會補助費	八五・〇〇〇	八五・〇〇〇	〇	〇	〇
第三款 テニスコート修繕費	三〇・〇〇〇	三〇・〇〇〇	〇	〇	〇
第四款 資金返還	一〇〇・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇	〇	〇	〇

第一項 講演部費	一六・〇〇〇	一六・〇〇〇	〇	〇	四・〇〇〇
第二項 音樂部費	四・〇〇〇	四・〇〇〇	〇	〇	〇
第三項 雜誌部費	六五・〇〇〇	六五・〇〇〇	〇	〇	一・五〇〇
第四項 弓術部費	一〇八・〇〇〇	一〇七・九〇〇	〇	〇	〇・一〇〇
第五項 劍道部費	三六・〇〇〇	三六・二〇〇	〇	〇	〇・二〇〇
第六項 柔道部費	二二・〇〇〇	二二・五〇〇	〇	〇	〇・五〇〇
第七項 野球部費	五五・〇〇〇	五五・九〇〇	〇	〇	〇・九〇〇
第八項 庭球部費	七五・〇〇〇	七五・九〇〇	〇	〇	〇・九〇〇
第九項 旅行部費	三三・〇〇〇	三三・九〇〇	〇	〇	〇・九〇〇
第十項 漕艇部費	五〇・〇〇〇	五〇・九〇〇	〇	〇	〇・九〇〇
第十項 競技部費	三三・〇〇〇	三三・九〇〇	〇	〇	〇・九〇〇
第三項 各部賞品費	一六・〇〇〇	一六・〇〇〇	〇	〇	〇
第四項 特別大會費	三三・〇〇〇	三三・〇〇〇	〇	〇	〇
第五項 春季運動會費	二五・〇〇〇	二五・〇〇〇	〇	〇	〇
第六項 秋季運動會費	二五・〇〇〇	二五・〇〇〇	〇	〇	〇
第六項 會務費	四〇・〇〇〇	四〇・〇〇〇	〇	〇	〇
第二款 豫備費	三三・〇〇〇	三三・〇〇〇	〇	〇	〇
第三款 積立金	一七六・二〇〇	一七六・二〇〇	〇	〇	〇
第一項 永久資金積立金	八五・〇〇〇	八五・〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 野球場改修積立金	九〇・〇〇〇	九〇・〇〇〇	〇	〇	〇

會長	武藤 虎太
副會長	上原 菊之助
理事	星野 信之長岡 寛統
會務委員	上村 茂次郎 松本 藹

部長 江上秀雄
委員 上原菊之助
駒井徳太郎

部長 音 樂 部
委員 犬塚岸三
大藪虎亮 高橋禎二

部長 篠原一慶
委員 浦井鏗一郎 赤井直好

栗原廣道 井奥光宣
大河良一 清水宗次郎
倉崎重俊 藤井信英

部長 弓術部
委員 鴻巣盛廣
市村塘瀨川重禮

部長 岸 重次
委員 上原 蘊之助 山本 與吉
古賀 恒吉 坂井 榮太郎

柔道部
部長 清野耕治
委員 長岡寛統 石井忠純

委員 部長 泉 瑛
星野信之 小原度正
山崎曾太郎 徳山見

委員 栗原廣道
市村塘 金崎顯彦

部長 石井 忠純
委員 林 竝木 神保 龍二

漕艇部

委員長	部長
宮崎	翠川潤三
崎人	長岡寛統
一	内田昇三
美日	
電	

委員長	松山康民
委員	泉 瑛望月勝海 大野平作 高木友雄

部長 上原菊之助
委員 山本與吉 榎本竹治

昭和三年度北辰會
委員

文三甲 上田政次 文三丙 岡部利良
理三甲 酒田文竊門 理三乙 天野貞一郎

文三乙	添木	文三乙	天浪久雄
文三丙	飯島	文三乙	川島熊夫
文三乙	香取敬司		

音樂部
理三丙 長尾四郎 理三丙 寺本 皖
理三丁 竹田谷勲

理三丁	宮川正澄	文三甲	乙村修
理三乙	松見三郎	理三甲	森三郎
理三甲	南新吉	文三丙	中島清

文三丙 八田邦次 理三丁 千田勘太郎
文三丙 泉原寛 理三丁 太田眞一

柔道部
文三 北久一 文三 石村晴雄
文二 藤岡康治 文二 木津孝

理三丁 黒川孝一 理三丁 江崎唯人
文三乙 浅井 潔 文三丙 白川正雄

理三乙 打田安富 理三丁 佐藤幸雄
文三丙 谷山哲男 文三甲 八谷晋兵衛

理三丙 中村 謙 文三丙 津野清也

理三丁	高木正夫	理三甲	内田一郎
競技部			
文三丙	上田晶次	文三乙	楠田武雄

文三丙	池田博二	文三丙	野上新平
理三乙	石川孝雄	理三丙	會田宗太郎
理三乙	松林敏夫	理三丁	佐藤恭雄
共濟部			
文三甲	龜坂文衛	文三丙	岡部利良

文三乙	高井義一	理三乙	天野貞一郎
文三乙	柳川余四郎	文三乙	根崎治三郎
文三甲	山本法純	文三乙	添木 瀆

理三乙	中林陸犬	文三乙	川島熊夫
理三丙	山縣幸雄	文三丙	千石喜文
文三甲	小杉 巖	文三丙	坂島 愼

文三丙	森田二郎	理三甲	三村平八
文二甲	米澤英雄	理三甲	關谷要吉
文三乙	井上武夫	文三甲	上田政次

理三乙長谷川一太郎 理三乙清水重正
文三丙林秀夫 理三丁宮川正澄
理三丁田邊太郎

文三丙	林秀夫	北久一	文三甲
	理三甲		文三乙
	瀧山養		古川清一

理三丁	宮川正澄	文三甲	藤岡康治
文二乙	野上新平	文二丙	中島清
理三甲	關谷要吉	理二乙	足立浩

理三丙	後藤 騰	理三丁	田邊太郎
文二甲	山崎清一	文二乙	荒木甚之助
文二丙	澤崎綱之	理二甲	小松 榮
理二乙	鈴木菊太郎	理二丙	木村喬夫
理二丁	今井武博		

部 報

講演部々報

時代の潮流に掉さして「我在り」と高く叫びつゝ飽くまでも「信するの人」として、眞摯なる生活の行者として、健實な歩みを念願しつゝ、我部は歩みを進めつつ居る。そして全校友の思想感情の反映所として人格陶冶の鍛練場として我部が擔ふ重大なる使命を感じつゝ、今新學年のスタートに立つて居る。

今こゝに昨年七月より一ヶ年間の我部の動靜を述べて校友諸君の我部に對する理解と聲援を俟つ次第である。

◎昭和二年七月十四日夜、名古屋市愛知縣會議事堂に於て八高四高聯合辯論大會を開催す。メンバー次の如し。

一、死 八高 牧田 春三君

一、久遠の榮光 四高 上田 政治君
一、學問への反逆 八高 井上 良三君

一、現實に於ける仿徨性 四高 矢浪 久雄君

一、眞摯な歩み 八高 小塚 一雄君

一、安住点を求めて 四高 飯島 稔君

一、群衆に對する社會心理學的考察 八高 芝崎 邦夫君

一、眞理の追求と矛盾の止揚に於ける建設的意義 四高 添木 漢君

一、密雲を破りて輝き出づる「我」の太陽を仰ぎて 八高 吉村 昌美君

一、既成宗教と科學 四高 坂野 龜一君

◎夏期巡回講演は能登方面に出掛ける豫定なりしも諸種の障害の爲め遂に中止となり第二學期に入る。

◎十月二十一日夜西町公會堂に於て秋季公開演說會を開く。縣議戰の

直後にて演說會續きの折にもかかはらず聴衆堂に満ち稀に見る盛會であつた。

一、十字街頭に立ちて 野上 新平君

一、主觀が客觀か 香取 敬司君

一、光明に浴して 山本 法純君

一、西洋の没落と東洋の勃興とを論じて日本青年に激す 川島 熊夫君

一、止揚とあきらめ 千石 喜文君

一、政黨存在の合理性と理想化 水口 菊一君

一、思想と生活 藤田 信勝君

一、新興國チエツコス ロバツキヤ 長岡 教授

◎十一月六日、金澤高工主催北陸高等專門學校雄辯大會に左の辯士を派遣す。

「文化と自然科學」 越後 一雄君

◎十一月十六日、名士講演會として本校出身法學士堀明近氏の「南米視察談」を聴く。氏の講演は從來のそれ等と大いに趣を異にし、内面的に

透徹したる専門的研究に互り、我移民の現状及將來につき特に詳細なる考察を開陳され三時間餘にわたる長廣舌は一同に多大の感銘を與へ、その南米觀を啓發されたる所少なからず。

◎十一月十八日、至誠堂に於て校内雄辯大會開催。

一、人間として生きたい爲めに 鈴木 廣雄君

一、近代思想の解剖と學徒の使命 矢島 四郎君

一、東光を求めよ 關根 太郎君

一、人生の十字街頭に立ちて 長尾 拾一君

一、所謂反動生活の意義を問ふ 長田 清道君

審査の結果矢島、長田、關根三君にメダルを送る。

◎十二月三日、名士講演會として國際聯盟協會幹事大熊眞氏を招待し「國際聯盟と帝國主義」なる題下に數時間の講演會を開く。

◎昭和三年二月四日(土)夜至誠堂に於て公開討論會開催。論題は「我國

に於ける婦人參政即時實施の可否」で聴衆滿堂の盛會であつた。

當日の出演辯士は左の如し。

賛成派 飯島 稔君

千石 喜文君

沖浦 敏行君

越後 一雄君

堀田 武俊君

廣瀬 嘉一氏

辯護士 香取 敬司君

小倉 武彦君

山本 法純君

森田 二郎君

清水 兼男君

市會副議長 市川 潔氏

◎三月我部は水口、堀田、長田、管野君を東大に、藤田、藤井、小川、坂野君を京大に、越後君を金澤醫大に送る。

◎四月我部は三十有餘名の新部員を迎へて一層の活氣と緊張とな覺えつゝ、新容既に成り、従前の通り毎週二回定期例會を開き、辯論と思想の

修練を重ねつゝあり。

◎四月二十四日、至誠堂に於て新入生歡迎演說會を開く。

一、人間の行く所 香取 敬司君

一、人口問題に關する一考察 川島 熊夫君

一、問題の解決 山本 法純君

一、?を以て呼びかける 矢浪 久雄君

◎四月三十日、名士講演會として基督教青年會と共同にて、工學博士佐藤定吉氏を招き「科學と宗教」なる演題の下に數時間に互る講演を聴く。

◎四月末迄の我部の事業は大体右の通りである。昨年度前期は御諒閣中とて何かと行事の方も控え勝ちであつたが、今年は一層内容充實に勉めると共に謙般の事業を盛んにして大いに我部の使命を發揮する心算であります。

最後に校友諸君の鞭撻と援助とな切望して筆を擱く。(添木記)

音楽部報

洋楽の隆盛は著しくて深く人の核心に喰ひ込んで來てゐる。だが高名であるといふので、感興も起らない演奏から何物かを得ようと焦燥したりするのはとらない。自分自身の音楽を持ちたいと思ふ。

トライアングル一つでもよい、手に取つてオーケストラに打ち込んでゆくときには素晴らしい充實した感があるのである。吾々は自分の音楽を持つてそれで自分等の有する何かを表現したい。今ヴァイオリン・マンドリン・オーケストラを練習してゐる。この形式は意氣の投合によることが大であるから吾等學生團に最も適當してゐると思つてゐる。

魂が反映して創造された音楽を力強きもの繊細なもの歡喜に満ちたもの等々とする。それで吾等の持つ新鮮な力強さを反映せしめて吾等の音楽に獨特なところを持たしめ得るわけになる。たゞ音の美としてこの新

鮮な力強さを現はすのは容易なことではないが、これさへうんと練習したならば吾等の音楽は特自の境地を有することになるのである。吾等の先輩が當地の他學生團に勿論或る意味に於て他の音樂團をも凌駕して來たのはこの新鮮さと意氣によつたのだつた。

ところで吾等は双肩に大きな責務の掛つてゐるのを感じてゐるものでいたづらに音楽に溺れてゐるものではない。たゞ若い魂が音楽を求めて止まないのだ。吾々の魂の強調と共鳴するリズムを音楽に見出してゐるものである。音楽の力強いリズムを共鳴し得ない魂は力を缺いてゐる、音楽の喜びに共鳴し得ない魂は正しい喜びを缺いてゐると云へないだらうか。

昨年二學期の音樂會は至誠堂で行つた。

- 一、ヴァイオリン・オーケストラ
美しきフランス……ト・パニ
- 二、マンドリン・オーケストラ
(a) ナターレ……ア・ア・ダイ

- (b) スコティッシュ・スガリ
- 三、マンドリン・クワルテット
歌劇 ラ・ジナシエラ……ベリニ
- 四、マンドリン・オーケストラ
村の祭り……

- 五、マンドリン・オーケストラ
朝……フアン・ジュリアン
- 六、ヴァイオリン・オーケストラ
若き日の夢……ワルド・トイフェル
- 七、マンドリン・オーケストラ
組曲西班牙の印象……

(理三丙 長尾)

旅行部消息

幾多の記録をもつ輝かしい歴史を護り、先輩の築かれた立派な城閣を守備して、吾々は出來得る限りの犠牲と努力をつんで來ました。或時は灼くが如き暑熱の中に、或時は咫尺を辨ぜぬ猛烈な吹雪を犯し、又は花

を見捨て、残雪深き山野は臥して、全力をつくして頑張つて來ました。併しこれを先人の残されたものに比してはあまりに貧弱なもので真にお恥しい次第です。これこそとりもなほさず私達の努力が足りないのです。今後一層の頑張りをもちつて四高旅行部の意氣を天下に示す覺悟です。

随分北辰會雜誌には部報をのせることが遠ざかつてゐますのでいつからののをせやうかと考へましたがあまり多くなりすぎから本號では昨年度の分だけをのせることに致しました。次に掲げる日誌によつて微力ながらも吾部の活動の跡を見て下さい。

昨秋は諒闇のために活動寫眞會を取消しました。しかし乍ら山の方では天氣がかなりつゞいた爲新雪をふんでかなりの活動を致しました。三學期のスキー登山も收穫は多くありました。春季旅行班としては薬師嶽黒部五郎嶽のスキー踏破、及大長山經ヶ岳、大門奈良のスキー行何れも成功した事は昭和二年度掉尾の奮闘

でした。

昭和二年度日誌

- ◇奥醫王より福光越(佐伯、瀧山)
四月十七日 スキーに尙ほ適す
- ◇醫王山スキー行(天野)
四月十七日 最後のスキー練習
- ◇口三方山行(佐伯、下平、瀧山)
四月廿一日
- ◇醫王山行(橋浦外十四名)
四月廿三日
- ◇新入生の歡迎登山。幸ひ天氣絶好。
高三郎、奈良、大門山(佐伯、下平、森鼻、瀧山)
四月廿九日
- ◇大門山行(橋浦、中村、山本、天野、沖浦、青木)
四月卅一日
- ◇醫王山行(谷口、大塚、北)
五月一日 見上峠經由
- ◇倉ヶ岳行(前田、淺井、外一名)
五月一日 月橋驛下車
- ◇醫王山行(宮川外十二名)
四月廿八日
- ◇新入生歡迎第二回の登山である。
大門山行(北、天川、今井)
- ◇五月七日
- ◇口三方、三輪山縦走(橋浦、瀧山)
五月七日
- ◇雪なればや、困難。
二又川踏査(下平、佐伯、森鼻、瀧山)
五月廿一日
- ◇五月旅行班
白山行(天野、前田、淺井、山瀬、今井、岡村外一名)
五月廿八日
- ◇立山行(北、天川、谷口、大塚、津野、中根)
五月廿八日
- ◇薬師旅行(佐伯、山本、沖浦、青木)
五月廿八日
- ◇天氣良好にて丸山よりの新コース開拓
毛勝山行(瀧山、森鼻)
五月廿八日
- ◇毛勝を中心片貝谷其の他を研究す。

- ◇夏季旅行班査定會(部長外部員全部)
六月九日(塾に於て)
◇夏季旅行班準備會(校長、部長外
部員)
七月七日(動植物實驗室にて)
夏季旅行班
◇能登一周(増村外二名)
七月十二日—十八日
◇上高地キヤマヒンク(山口他八
名)
七月十八日—廿五日
◇富士登山、五湖巡り(善積外六名)
七月十日—十四日
◇八ヶ岳、富士登山(藤田喜、中根)
七月九日—十三日
◇白山行(北外二名)
八月廿二日—廿四日
◇立山より劔澤へ(中川外一名)
七月十一日—廿一日
◇常念山脈及穂高へ(山本、山瀬)
七月十日—十九日
◇薬師より槍、穂高(天川、津野、
今井、村田、生田)
七月十一日—廿三日

- ◇劔より白馬嶽(藤田精、内田外二
名)
七月十二日—廿一日
◇南澤より烏帽子、槍(大塚、前田
外一名)
七月十日—廿日
◇白峰三山へ(青木)
八月十七日—廿六日
◇後立山より仙人谷、劔嶽(瀧山、
森鼻)
七月十日—廿五日
◇穂高ツアンデルンク(橋浦、佐伯)
七月十二日—廿三日
◇劔へ(先輩中島、本仁、中村)
七月十一日—廿二日
◇劔、八峯、源次郎へ(中村、佐伯、
瀧山、津野)
八月廿三日—九月二日
八峯、源次郎尾根のロッククライ
ミングで見事成功した。
◇醫王山行(北、大木)
九月四日、見上峠經由
◇後谷キアンヒンク(佐伯、瀧山、
山本、藤田、北野、今井、外三名)

- 九月十日—十一日
◇夏季旅行班報告會(校長、部長外
部員)
石川屋樓上に於て、九月七日夜
◇寶達山行(青木、飯野)
九月十八日
◇ブナ越五箇荘(森鼻、津野、瀧
山、中根、藤田)
九月十七日—十八日—十九日
◇岳峰視察(瀧山、天野)
九月廿四日
◇寶達山行(瀧山、山本)
九月廿五日
◇白山行(森鼻、津野外六名)
九月廿四日—廿五日
◇立山行(北、大木、藤田、北野)
九月廿三日—廿四日—廿五日
◇舉原山より水葉へ(瀧山、津野外
一名)
十月一日—二日
◇醫王山行(瀧山、善積外二名)
十月九日
◇倉ヶ岳行(天野、佐伯、津野、藤
田、室谷)
十月九日

- ◇醫王山行(北)
十月九日
◇部定期コンパ(林部長外部員全部)
十月十三日於塾。新舊委員交替及
秋季旅行班の査定。
◇白山行(瀧山、北、中根、藤田喜)
十月十五日—十六日—十七日
岩間温泉經由の計畫は機道取毀の
爲白山温泉經由に變更した。
◇黒部行(善積、山瀬、室谷、大木
外四名)
十月十六日—十七日 祖母谷迄
◇不歸谷行(津野)
十月十五日—十六日—十七日
◇黒部行(大塚外一名)
十月十六日—十七日—十八日
◇醫王山行(大木、外一名)
十月廿三日
◇黒部行(細井)
十月廿五日—廿六日—廿七日
◇大門山及桂へ(善積、大木、高橋)
十月廿五日—廿六日—廿七日
◇黒部より白馬山行(山本、今井、
藤田喜、岡村)助七
十月廿二日—廿三日—廿四日—廿

- 五日—廿六日—廿七日
◇毛勝行(佐伯、津野外二名)
十月廿五日—廿六日—廿七日—廿
八日
コースの關係でかなりの困難と戦
つた。
◇薬師嶽行(瀧山、山瀬、北野)兵治
十月廿五日—廿六日—廿七日—廿
八日—廿九日
◇石井先生歓迎コンパ(出席者廿七
名)
十一月廿一日於ブラジル。渡歐よ
り歸朝された吾部委員石井先生を
迎へ盛會。
◇關温泉スキー講習(部員其他にて
卅九名)
十二月廿五日—昭和三年一月一日
深井、内田兩先輩も加はり盛況な
りき。
◇醫王山スキー行(中村、瀧山、青木)
一月七日—八日 湯谷原經由
◇醫王山行(一月十四日—十五日)
スキー
第一班(瀧山、森鼻、北、大木)田
島より

- 第二班(中村、山本、藤田一、室
谷)湯谷原
第三班(佐伯、津野、北野、中根)
二俣
第四班(前田、橋浦、今井)二俣
より
◇奥醫王山スキー行(中村、森鼻、
天川、山瀬、外一名)二俣より
一月廿一日—廿二日
◇同右第二班(瀧山、津野、北、外
一名)
湯谷原より枌尾へ下る
◇送別コンパ(出席者卅四人)
一月卅一日於並木樓、卒業生十一
名
◇醫王山スキー大會(部員外四名
雪量のため醫王山にしたが参加者
少いのは残念であつた。
二月四日—五日
◇經岳スキー行(瀧山、北野)
二月四日—五日
◇大長山スキー行(瀧山、藤田喜)
二月十日—十一日—十二日
◇立山スキー行(津野、北、山瀬)
二月十日—十一日—十二日

弘法茶屋を中心としてスキー練習
 ◇後高山スキー行(津野、北、今井、
 藤田、瀧山)
 二月十九日、手輕な絶好のスキー
 地なり。

春秋旅行班

◇薬師嶽、五郎岳スキー行(山本、
 瀧山、森鼻、津野)

三月十日―三月廿一日 薬師及五
 郎は絶好のスキー日和に恵まれて
 首尾よく成功

◇立山スキー行(北、山瀬、今井、
 藤田喜)

天候の関係で雄山頂上を断念せし
 は遺憾

◇大門山、見越山スキー行(佐伯、
 北、津野)

三月卅一日―四月一日

スキー登山としてかなり興味深し

◇大長山、經ヶ岳スキー行

四月五日―六日―七日―八日―九
 日 以上

これで昭和二年度の活動を終つて
 引續き新學期の頑張りに入る事とな
 った。(山本記)

六號 雜記

加藤 正男

夏が来た。愈々氣持が良くなる。
 夏は凡ての時季より好きだ。暑さ!!
 それは水によつて帳消しだ。水は夏
 にとつて兄弟の如きものだ。水に活
 躍、それは云ふまでもなく水泳だ。
 水泳部なるものがないけれど水泳
 會によつて益々水に親しむ事を得。
 水に親む者は水泳會に、今年は松任
 ブールだが練習の相間々々に行
 つてはどうか。海も競争にはもつて
 のこいだ。唯海はコースがとりにく
 いのだ。朝から晩自然を相手だ。プ
 ールでは眼が悪く健康によくないが
 競争にはもつてこいだ。

プールと海と牛々に水泳したい。
 それだけ水泳會の人々に望む。

今年はどうか我々の愛する水泳會
 が部になつてくれればよいが。神に

祈りをかけて。

もつとも不思議に感ずるのは四高
 に日本の國技たる角力がない事だ。
 金澤高工にも角力部がある。金石の
 學生角力大會に四高が出場しないの
 は聊か物足りない。
 甲曰く「四高には何故角力部がない
 のだ。」

乙曰く「四高には力士になる様な体
 の持主がゐないのだ。そうして碌
 でもない大聲で歌を歌ふのが藝
 さ。」それは四高の名譽をきつつけ
 る言葉だったので傍の四高生、
 丙曰く「俺の學校は、高工等と異
 つてこんな角力の如き時代後れの
 ものをやつてゐるかい。その上
 れ、部が澤山あるから今更その上
 に角力部をいいたら、たまらない
 よ」と云つた。

この様に角力部がないのは何やら
 物足りない。水泳會もやがて部に
 なるだらう。あまり澤山部があつ
 ても費用にかゝるから。いゝ、
 加減に制限すればよい。」と誰か

おどしたのでその話はこれで止め
 になつた。

米澤 英雄

國本田獨歩に詩想と題した四つの
 小品がある。

一人の旅人が雪深い山中で凍死し
 やうとする。通り合せた情深い旅人
 が是を介抱する。甲の旅人は非常に
 喜んで乙の情深い振舞を人にも語り
 後の世にも傳へんと誓ふ。がやがて
 二人とも踏外して底知れぬ雪の谷に
 落ちこんでしまふ、といふのがその
 一つである。

人間の行爲。それがかくの如き善
 行にしろ、又罪惡にしろ、人知れず
 埋れて了ふものがどうしてないと言
 へやう。そしてそれ等の行爲は何處
 へ行くのか。

社會の制裁を受けるのが罪惡のす
 べてではなく、社會の賞讃をうける
 のが善行のすべてでない事は、新聞
 紙上にあらはれるのが、社會に行は

がたに他ならない。
僕たちは、たゞ僕たちに出来る
ことから盡すことを誓つて、いゝの
である。

諸君の中には、此の北辰會雜誌が
僕たち少數の者の手に委ね弄さるゝ
ことに對して不平不満を感じられる
人があるかもしれない。貴い公器が
僕たち一部の者に私器の如く自由に
されることに憤りを抱くのがあら
れるかも知れない。僕達も眞心よ
り言ひ得るは、實にかゝる人士を待
つと云ふことだ。

是迄のところ、然うした方が餘り
にも無き過ぎはしなかつたか。なる
ほど、單なる反感のためにのみ、反
感から、揭示の貼紙が小さいとか、
やれ墨の色が薄いと、文字が細い
とか云ふことを唯一の楯にとつて攻
撃して来る手合、若しくは、僅かの
私的な恨みの腹癢せにとて、かりそ
めの落度ごとに横槍を入れ、いつぞ
やの會合のポスターには時刻が書い
てなかつたとか、あつたとか、僕た

ちのやる事毎をかれこれと云ふ輩は
ゐるに居た。誰かの言ひ草ぢやな
い、勿論そんな人達は今頃はきつ
と悔ひてゐるに違ひないが、後
者に對しては何ら云ふべき舌は有ら
ない。只、前者に云ひたいのは、君
たちが、聽てその眞情を距てなく僕
たちに告げ明かして呉れることに依
り、互ひによく理解し合ひ結ばれた
二人となるのが可能であると云ふ
ことだ。

人間であれば人間として、しかも
青年であつてみれば青年として、何
ら云はんと欲するところのもの
が、何人の中にも存するであらう。
「thinking man」の一員としての
を考へ、各々が一個の human being
として思索するとき、必然僕達の誰
もは默されはしない筈である。

其の云はで止み難い思ひに何らか
は藝術的な興奮を感ずるのちから
が、唯にこの僕たちのみに存するな
どの己惚れを棄て、僕たちは衷心
より、當然来るべき多くの人々を寛

めて歎まない。

吾々の考へが刻々に變ると云ふこ
と——それは文を書き残すの愚かさ
を示すことわりとは毫もなり得な
い。よしや、變ればとて、否、變れ
ばこそ、その刹那々々の自らなる想
念の相をしろしめおかれればなら
ないのであるまいか。僕たちは今
日の自分のために潔く昨日の殻を破
つて來た。さるを、僕たちは明日あ
るが爲にこそ今日は讀み且書かれ
ばならない。

曙の清らかな光りの裡に僕たちは
集ひよつた。選ばれた一つの道が足
もとよりのびてゐる。互ひに固く執
り合つた掌から愛の悦びが汗ともな
つてにじみ出るのだ。

僕たちの目差すものは定められ、
僕たちの進む方は決められた。何者
と雖もこの大いなる力を阻むことは
不可能である。

けふ、僕たちは先づ最初の一步を
踏み出した。

編輯後記

宮川 正澄

こんな薄つべらな雜誌になつて仕
舞ひました。けれど之も仕方がない
と思ひます。——この多事であつた
一學期をふり返つて見ますと——

◇ 原稿の集りは少なかつたが、去年
に比べれば多い方です。

◇ 薄いと云つて不平を云はれる方も
あるかも知りませんが、しかし厚い
のを出すばかりが雜誌部の能ぢやあ
りません。

◇ 從來の雜誌部とちがつて部員二十
餘名の大家族になつた。——さて未
知數である一年生諸君の中から誰か
すばらしい文才が一人でもいゝから
飛び出さないものかしら——。

◇ 何か書きさうな顔をして居る諸君

が随分あるのに——そして八百人も
居るんだから、少くとも五六十の原
稿位は集つてもいいのだが……。

◇ さて愚痴は抜きにして、一つ約束
しやうやありませんか。全校八百
の諸君。諸君の雜誌が諸君の公平な
る感情や思想の發表機關となるやう
に、そして今發育の逡巡にあるこの
子を丸々とふとらすために夏の休暇
の一日をさいて、この雜誌のために
そしてこの子のためにペンを握るこ
とを。

◇ 外には雨が降つて居ます。

そして、夜も大ぶん更けたやうで
す。——電車の響きもう聞えませ
ん。たゞ甲高い女の聲を幌の中に包
んだ自動車が一台夢の様に疾走して
過ぎた切ります。——
さあ。寝よう……明日の活動のた
めに……。

一六、三〇一

